

霪雨の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、恙なくお過ごしの事と大慶に存じます。また日頃より当支部運営に際しまして力強いご支援やご協力を賜り、衷心より御礼申し上げる次第です。

さて6月の自衛隊関連行事は、4日に宮崎県偕行会総会が「ニューウェルシティ」に於いて眞方会長統率のもと盛大に開催され、旧陸軍士官学校卒業生の方々と親しくお話しをさせて頂きましたが、陸士出身者と云っても#57～#60期生の90歳を超えられた大先輩達で、往事を偲ばせる精悍な風貌や背筋がピンと伸びた姿勢に、陸士教育の厳正さの一端を垣間見た思いでした。

また同19日は宮崎県隊友会総会が「ひまわり荘」にて開催され、三浦新会長の初仕事でしたが、百人前後の参加者の前で肅々と会を取り仕切る様子を拝見し、藤井会長の後を継ぐ立派な会長が就任された事を内心大いに喜んだところです。

ところで同7日～16日の間渡米してシカゴ・ピッツバーグ・ニューヨーク等を巡り、ハドソン川に浮かぶ空母「インテルピッド」を見学して来ましたが、歴戦の空母の迫力は圧倒的で、同艦は太平洋戦争たけなわの1943年8月に就役し、1944年2月初陣のトラック島空襲では日本軍機の魚雷1本が命中して大きな損害を被りました。

また同年10月からのレイテ沖海戦では3機の日本海軍特攻機に突っ込まれ、80名を超える戦死者を出したらしく、翌45年にも二度に亘る特攻機の体当たり攻撃にも耐え沈没すること無く、終戦を迎えたそうです。

全長250m、基準排水量27,100t、艦載機100機、乗員2,600名と現在の原子力空母と比較すれば若干小振りですが、日本軍と死力を尽くして戦う勇姿を想像しながら、硝煙くすぶる71年前の太平洋の島々に思いを馳せた次第です。

今月も小川先生より、6月8日に生起した「中露艦隊尖閣接続水域侵入事件」の分析がメルマガで送信されて来ましたので掲載させて頂きます。

## 尖閣に中露艦隊！最後に残る見方は -----

中国とロシアの軍艦が尖閣諸島近くの日本の接続水域を通過して、例のごとくマスコミをはじめとする「脊髓反射」的な世論がわき上がりました。

少し時間が経ったこともあり、今回は事件の第一報を受けて私がどのようなステップを踏んで考えを整理していったのか、ご紹介しておきたいと思います。

これはほかのケースにも当てはまることですし、情報機関や研究機関の専門家が分析を行ううえでのベースになる作業です。むろん、どなたにでも可能なことでもあります。

事件の経過は次の通りです。

1) 6月8日午後9時50分頃、ロシア海軍のウダロイ級駆逐艦(満載排水量8700トン)や補給艦など3隻が、尖閣諸島の久場島と大正島間の接続水域に入り、北に向かい航行しているのを海上保安庁の巡視船が発見、海上自衛隊の護衛艦「はたかぜ」(満載排水量6000トン)が確認した。9日午前3時5分ごろに接続水域を離れた。

2) 6月9日午前0時50分頃、尖閣諸島北東の接続水域に中国海軍の艦艇が入った。ジャンカイ級フリゲート艦(満載排水量4053トン)1隻で、こちらも海上保安庁の巡視船と海上自衛隊の護衛艦「せとぎり」(満載排水量4900トン)が警戒監視する中、フリゲート艦は午前3時10分ごろ、大正島北北西から接続水域を離れ、北に向かった。領海侵入はなかった。

3) 外務省は午前1時15分頃、石兼公博アジア大洋州局長が劉少賓在日中国大使館次席公使に対し、電話で抗議、在北京日本大使館も、中国外務省に対して電話で抗議した。午前2時ごろには、齋木昭隆外務事務次官が程永華駐日中国大使を外務省に呼び、約20分間、重大な懸念を表明して抗議するとともに、接続水域から直ちに出るよう求めた。

4) ロシアに対しては(尖閣諸島の領有権を主張)していない。中国とは区別して対応していく」と述べ、「外交ルートを通じた必要な注意喚起」にとどめた。

尖閣諸島周辺では、2012年に当時の民主党政権が尖閣諸島を国有化した直後から、中国公船が断続的に領海侵入を繰り返し、接続水域での航行が常態化しています。中国軍については、昨年11月に情報収集艦が尖閣諸島に近い公海上で活動しているのが初めて確認されましたが、接続水域に入ることはありませんでした。

最初に頭に浮かんだのは、10日から17日まで、沖縄東方海域などで行われる日米印共同訓練『マラパール2016』などをにらんで、中国側がメッセージを発したというものです。

中国を念頭に置いた日米と関係国の合同演習は、6月28日にハワイ沖で予定されている日米韓のミサイル防衛合同演習も控えています。

6月3日～5日にシンガポールで行われたアジア安全保障会議(シャングリラ・ダイアローグ)での南シナ海をめぐる米中の緊迫したやり取りもありました。

そうした動きの中で日米と関係国に押されっぱなしということでは、中国国民のナショナリズムが許してくれません。これは経済格差の固定化に対する国民の不満と相まって、共産党政権の基盤を揺るがすことにつながりかねないのです。

それもあって、これまでやってきたのと同様に、「弱腰ではない」ということを日本のマスコミ報道を使って中国国民に伝える動きを見せた、それが中国フリゲート艦の接続水域航行だったという見方です。

むろん、日米と戦火を交えることがないよう、慎重に計算した行動であることはいうまでもありません。日米を相手とする紛争は、下手をすれば中国に進出している国際資本の撤退という、天安門事件を想起させるほどの危機的な事態につながる恐れがあるからです。

ロシア艦隊との関係は、1)両国の政府レベルで示し合わせて共同行動の姿勢を見せた、2)現場の艦船のレベルで一定の連携行動をとった、3)ロシア艦隊の行動を利用して中国側が尖閣諸島の主権の主張につながる行動をとった、といったことが頭をかすめます。

中露の海軍の協力関係を見せつけることは、日米印、日米韓の合同演習への強いメッセージになることは間違いないからです。

しかし、「共同行動」には中露の艦船が同じ接続水域にいたのは2時間ほどでしかなく、特別な動きも見られていません。それに、中国のフリゲート艦は北上してくるロシア艦隊に対して正面から南下してすれ違う行動をとり、その後、反転してロシア艦隊を後方から追尾する形になっています。ロシア艦隊が接続水域の通過に5時間を要したのは、東南アジア方面への遠洋航海の帰りで、船足の遅い補給艦を伴っていたことによると見られています。

そこで不要な要素を削り落としていくと、次のように眺めるのが自然ではないかという分析に落ち着くのです。

**【結論】中国のジャンカイ級フリゲート艦は、通常通り尖閣諸島北方120キロほどの東シナ海を遊弋していた。正体不明の艦隊の北上を察知し、急いで南下した。ロシア艦隊と確認したあとは、中国が主張する「領海」に入らないよう監視するために追尾した。ロシア艦隊が接続水域を出たことを確認したあとは、もとの任務に戻って遊弋を続けた――。**

先に触れた、1)両国の政府レベルで示し合わせて共同行動の姿勢を見せた、2)現場の艦船のレベルで一定の連携行動をとった、といった可能性は最後まで否定できるものではありませんが、現段階ではフィクションの材料にすることまでを含めて、

視野に収めておくにとどめたほうがよいと思います。

むろん、海上自衛隊と海上保安庁は尖閣諸島近くの海域でパトロール任務に就いており、それが今回の政府による素早い対応につながったことはいうまでもありません。

アナリストは、こんな作業を年がら年中やっているのです。辛気くさいですね（笑）。

（小川和久）

以上のようにマスコミ報道とはかなりトーンが違いますが、専門家が持つ情報ネットワークに「識見」を加味するとこのような結論になるようです。

ところで今月10日は参議院選挙の投票日であり、憲法改正発議要件である2/3議席確保する為には支部会員の協力が欠かせません。

既に期日前投票を済ませた方も多いたとは存じますが、家族や職場の皆様にも是非お声掛け頂き、日本の安全保障や経済再生に真剣に取り組む安部政権へのご支援を伏してお願い申し上げます。

英国がEU離脱を国民投票で決定したところ、またスコットランド独立運動が再燃し、再度国民投票を実施する旨の法律を準備するとの報道がありました。

憲法改正も衆参両院2/3の賛成で発議出来ますが、最後は国民投票の結果に委ねられ、これで万一否決とでもなればまた数十年後にしか国民的機運は盛り上がりぬような気が致します。

岸信介元首相からの隔世遺伝子とDNAを併せ持つ安倍首相に「憲法改正」の実現を託さねば、私の目の黒い内の悲願は達成できそうもありません。(^^;)

梅雨が明けたら暑い夏の到来です。呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

平成28年7月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小 倉 和 彦